

上智大学フランス文学科・体験授業「フランス語・フランス文学（文化）への招待」

2011.7.23/24 吉村和明

Charles Baudelaire (1821-1867) シヤルル・ボードレール

シャルル・ボードレールの韻文詩集『悪の華』は詩の近代をしるしづける重要な作品として知られる。彼はまた、美術批評の分野でも重要な仕事を残した。

『悪の華』（1857-61年）とその時代

『悪の華』初版が刊行されたのは第二帝政期。大規模なパリの都市改造がおこなわれ、万博が開かれ、次々にデパートが開店し、鉄道網が発達していく、そんな時代である。

『悪の華』は、時代を支配する進歩と繁栄といった楽天的な未来像にあらがって「悪」の精神的価値をほめ称えた。公序良俗に反する表現があるというので裁判にかけられ、有罪となり、6篇の詩の削除が命じられる。

だがボードレールは「悪」というテーマを掘り下げていくことによって、赤裸々な人間の真実をえぐり出そうとした。そしてそれが詩における近代の出発点となった。

[ボードレールと美術]

1855年にフランスで初めて万博が開かれた。

万博には美術部門がもうけられ、ドラクロワやアングルといった巨匠たちの作品を中心に、フランス絵画の現在が誇らかに呈示される。この公式的な展覧会の向こうを張って、ギュスターヴ・クールベ(1819-1877)は個人展覧会を開いた。彼は大作《画家のアトリエ》によって「リアリズム(写実主義)」の美学を顕揚する。この絵の片隅に描きこまれたボードレール。

ふたりは1840年代後半に知り合い、一時は非常に仲が良かった。1848年に2月革命が起こったとき、ボードレールの発行した新聞一冊は二号だけだったが一に、クールベが扉絵を描いたりした。

しかし1855年のころには二人の仕事は別の展望のもとに営まれている。ボードレールはクールベの写実主義をもはや認めず、芸術的表現における「想像力」の重要性を強調する。そんなボードレールにとって理想の画家はドラクロワだった。

だが彼にとってさらに重要だったのは、「現代をいかに表現するか」という問題である。これに関して彼は「現代生活の画家」というテキストで深く論じているが、これはコンスタンタン・ギース(1802-1892)という、いまでいえばイラストレーターのようなマイナーな画家についての評論である。

さらに、エドゥアール・マネ(1832-1883)はボードレールの晩年、彼のもっとも親しい友人の一人だった。こうして、ボードレール→ギース→マネという系譜を考えることができる。

ボードレールの美術批評のおもしろさはいまでも古びていない。それは彼が、感性豊かにドラクロワやギースなどを論じるなかで、絵画を語る言葉のありかたを明敏な意識をもって模索したからである。

[[通りすがりの女に]]

雑踏のなかで男と女のまなざしが一瞬交錯する。大都市であればいくらでも起こりうる経験が韻文という形式のなかに凝縮されることで、言葉に強いエネルギーが負荷される。

言葉を抽象化することによって秘められた力を解き放つ。これこそが「現代性」を特徴づける詩法で、それはまさにボードレールとともに始まった。